

研 究

首都圏で幼児を育てる母親の親以外の役割の捉え方
—就業の有無別の検討—岩崎 りほ¹⁾, 有本 梓²⁾, 成瀬 昂¹⁾, 村嶋 幸代³⁾

〔論文要旨〕

就業の有無別で、母親の「親以外の役割の捉え方」に関連する要因を探索するために、平成23年、東京都内の1歳6か月児健診対象児の母親に質問紙調査を実施した。「親以外の役割の捉え方」は、「就業あり群」では、仕事に満足を感じている、夫の評価的サポートがある場合に良好であった。「就業なし群」では、夫の評価的・友人の手段的サポートがある場合に良好で、子育てのためにやりたいことを我慢していると感じている場合に良好でなかった。「親以外の役割の捉え方」を良好にするためには、夫や友人からのサポートを得ること、母親が子育てのために自分のやりたいことを我慢しすぎないことを、母親と夫に啓発・教育する重要性が示唆された。

Key words : 親以外の役割の捉え方, 母親, 就業, 幼児, ソーシャル・サポート

I. 緒 言

次世代育成支援対策推進法では、母親が安心して子育てできる環境を整えるには、国、地方自治体、企業が努力することを勧めている¹⁾。子育て中の母親と直接かかわる看護職等の保健医療職は、母親が安心して子育てできるように支援する必要がある。Rubin ら²⁾は、子育て中の母親とかかわる際には、母親自身の感情・思考・信念の捉え方を踏まえる必要があると述べている。この感情・思考・信念は、山崎や大橋らによって、親役割と親以外の役割に向けられるものと区分される^{3,4)}。それぞれの定義である「授乳や排泄の世話といった子育ての能力を身につけ、子育てに関心を持ち親としての役割に満足感を抱いている状態」⁴⁾を親役割の捉え方が良好、「夫や妻といった役割を持

ち社会で働く存在認識を示し、自己肯定感や社会との関係性を含む状態」⁴⁾を親以外の役割の捉え方が良好であると捉えることができる。「親役割の捉え方」に関しては、就業している⁵⁾、高齢出産でない、十分なソーシャル・サポートがある⁶⁾、精神的に健康である⁷⁾場合に良好であると言われている。

一方、「親以外の役割の捉え方」については、1970年代にイギリスで、その重要性が指摘され⁸⁾、近年、日本でも注目されてきた^{9,10)}。女性の社会進出に伴い、子育てに対する女性の考え方は変化し、「自由な時間が持てない」という者が母親の約2割¹¹⁾、「自分の趣味や娯楽を楽しむため結婚しない」という者が未婚女性の約半数¹²⁾いる。つまり、「仕事も頑張りたい」、「自分の生き方も大切にしたい」など子育て以外にも実現したいことを望む女性が増加していると言える^{13,14)}。

Recognition of Non-maternal Role among Mothers Rearing Toddlers in a Metropolitan Area
According to the Working Status of Mothers

Riho IWASAKI, Azusa ARIMOTO, Takashi NARUSE, Sachiyo MURASHIMA

1) 東京大学大学院医学系研究科健康科学・看護学専攻地域看護学分野 (研究職)

2) 横浜市立大学大学院医学研究科地域看護学領域 (研究職)

3) 大分県立看護科学大学 (研究職)

別刷請求先: 岩崎りほ 東京大学大学院医学系研究科健康科学・看護学専攻地域看護学分野

〒113-0033 東京都文京区本郷7-3-1

Tel : 03-5841-3597 Fax : 03-5802-2043

[2438]

受付 12. 5.24

採用 13. 3.17

「親以外の役割の捉え方」に焦点を当てた概念として、1964年に、Kahn ら¹⁵⁾により提唱されたワーク・ファミリー・コンフリクト (Work-Family-Conflict: 以後、WFC) がある。WFC とは、仕事役割と家庭役割が相互にぶつかり合うことから発生する役割葛藤を意味する概念で、子どもを持つ共働き夫婦を対象にした研究^{16, 17)}が増えてきている。しかし、WFC は就業していない母親には当てはまらない。親以外の役割として、仕事役割の他、「妻や女性」、「社会の一員」の役割等も考えられる。これらを含めた「親以外の役割の捉え方」を検討する必要がある。

この「親役割の捉え方」、「親以外の役割の捉え方」は、双方ともに良好であることが望ましい⁴⁾。看護職が、「親以外の役割の捉え方」を良好にするためには、その関連要因を明らかにする必要がある。しかし、「親以外の役割の捉え方」に関しては国内外共に研究が少ない。明らかになっている「親役割の捉え方」に関連する要因に、属する社会の規範として、「子どもが3歳になるまでは、母親が育てないと子どもの発達に悪影響を及ぼす」という三歳児神話¹⁸⁾や性別役割分業意識¹⁹⁾を含めて検討することとした。

そこで、本研究では、母親の就業の有無別に、幼児を育てる母親の「親以外の役割の捉え方」に関連する要因を探索することを目的とした。

II. 方 法

1. 研究デザイン

無記名自記式質問紙による横断研究とした。

2. 対象地域および対象者

1) 調査対象地域

東京都内の16ヶ所の自治体に、研究者が電話または訪問して調査説明を行い、7ヶ所の自治体から調査の協力を得た。7ヶ所の自治体は、東京都の北西部に位置し、人口7～26万人、出生率0.88～1.33人（人口1,000対）、過去の1年間の1歳6ヵ月児健診の受診率82.5～96.5%であった。

2) 調査対象者

平成23年8月2日～11月18日の間、自治体が実施した40回の1歳6ヵ月児健康診査（以後、健診）の対象児の母親全員を対象とした。除外基準は日本語の調査票の回答が困難な者とした。

3. 調査方法

4ヶ所の自治体では、研究者または研究協力者が健診会場の出口に待機し、健診を終えた母親に調査の主旨を書面および口頭で個々に説明した。2ヶ所の自治体では、研究者または研究協力者が、健診の集団指導の場面で同様の説明をした。これら6ヶ所の自治体では、調査同意の得られた母親に研究説明書、調査票、返信用封筒を手渡した。1ヶ所の自治体は個別健診のため、自治体から自宅に郵送する健診の案内物に、研究説明書、調査票、返信用封筒を同封した。全ての母親には、健診後に自宅で調査票に回答し、返信用封筒で研究者に郵送するよう依頼した。

4. 予備調査

平成23年6～7月、東京都内のA自治体（調査対象自治体の1ヶ所）に居住し1歳児を育てる母親7名に予備調査を行い、質問紙の内容と文章表現の明瞭性を確認した。また、調査協力の得られた7ヶ所の自治体の保健師40名から調査項目について助言を受けた。必要箇所の修正を行い、本調査に用いた。

5. 調査項目

1) 母親の「親以外の役割の捉え方」

母親の「親以外の役割の捉え方」は、親性尺度⁴⁾を使用し、「親以外の役割の捉え方」を表す下位尺度のみを用いて測定した。この尺度は、「親役割の捉え方」、「親以外の役割の捉え方」、「子どもの捉え方」を表す3領域33項目からなる。

「親以外の役割の捉え方」は、「私の生き方は、自分で納得のいくものだと思います」、「私は親として以外の自分に満足していません」など9項目で構成される。各項目に対し、「まったくそのとおり」～「まったく違う」までの回答に1～5点を与えて総得点を求めるもので、得点が高いほど親以外の役割を良好に捉えていることを示す。Cranach's α は0.89であった。

2) 子育てに対する考え

子育てに伴う我慢、三歳児神話・性別役割分業意識に対する考えを尋ねた。子育てに伴う我慢については、「子育てのためにやりたいことを我慢していると思いますか」に対し、「とてもそう思う」～「まったくそう思わない」の4件法で尋ねた。三歳児神話に対する考えは、「子どもが3歳になるまでは、母親は育児に専念すべきだ」という考え方について、あなたはどうか思

いますか」を尋ね、「まったく賛成である」～「まったく反対である」の4件法で回答を求めた。性別役割分業意識に対する考えは、「夫は外で働き、妻は家庭を守るべきである」という考え方についてどう思いますか」に対し、「賛成」、「どちらかといえば賛成」、「どちらかといえば反対」、「反対」、「わからない」の5件法で尋ねた。

3) 仕事に対する考え

仕事に対する考えとして、就業している母親には仕事満足度を尋ねた。仕事満足度は、「現在のお仕事や学校に満足していますか」に対し、「とても満足している」～「まったく満足していない」の4項目で尋ねた。就業していない母親には、「仕事に対するあなたの気持ちを教えてください」に対し、「仕事はせず育児に専念したい」、「子育てが落ち着いたら働きたい」、「すぐに働きたい」の3項目で尋ねた。また、第1子の妊娠・出産による就業状況の変化は、「もともと就業していない、または職場復帰のため変化なし」、「自分の希望での退職または転職」、「自分の希望に反した退職または転職」の3項目で尋ねた。

4) ソーシャル・サポート

夫・パートナー(以後、夫)、および友人について、Houseの分類²⁰⁾を参考に、情緒的、情動的、手段的、評価的の4種類のサポートを設定した。「情緒的サポート」は悩みを聞いてくれること、「情動的サポート」は困った時や迷っている時にアドバイスをくれること、「手段的サポート」は困った時に手伝ってくれること、「評価的サポート」は自分を認めてくれることとし、夫・友人の各々からそれぞれのサポートを受けている程度について、「非常にそう思う」～「まったくそうは思わない」の4件法で尋ねた。

5) 母親の基本属性

年齢、就業の有無、最終学歴、健康状態、経済状況、生育家族に対するイメージを尋ねた。就業の有無は、金銭的報酬を得る労働活動をしている場合を「就業あり」、それ以外を「就業なし」とした。生育家族に対するイメージは、坂間らの生育家族イメージ良好度²¹⁾で尋ねた。これは、7項目3件法の回答に0～2点を与えて総得点を求め、得点が高いほど生育家族のイメージが良いことを示す。本研究のCranach's α は0.86であった。

6) 子どもの基本属性

月齢、性別、出生順位、健康状態、子どもの発育・

発達の心配の有無を尋ねた。

7) 夫の基本属性および子育て環境

夫の有無、年齢、就業の有無、家族形態、子どもの人数、日中の主な保育者を尋ねた。

6. 分析方法

まず、就業ありの母親(以後、「就業あり群」)で、母親の「親以外の役割の捉え方」と他の変数との関連を明らかにするために、Pearson または Spearman の相関係数の算出、対応のないt検定および一元配置分散分析を行った。「親以外の役割の捉え方」と有意であった変数全て、即ち相関係数が0.2以上かつ $p < 0.05$ のものを独立変数、「親以外の役割の捉え方」を従属変数とした重回帰分析を行った。同様の分析を就業なしの母親(以後、「就業なし群」)でも実施した。多重共線性は $VIF < 5$ で確認した。解析は統計パッケージSAS 9.2を使用し、有意水準は両側5%未満とした。

7. 倫理的配慮

本研究は、東京大学医学部研究倫理委員会の承認を得て行った。調査対象者には、協力は任意であることと、匿名性の保持の方法を、配布時に口頭で説明し、調査票の返信をもって調査への同意とみなした。

Ⅲ. 結 果

調査票配布数は2,342票で、回収数は914票であった(回収率39.0%)。そのうち、親性尺度に欠損のある18名、シングルマザー14名、母親が学生の5名、精神疾患の4名、子どもが障害や疾患を持つ3名、回答の欠損が多い2名の計46名を除外し、868名を分析対象とした(有効回答率37.1%)。

分析対象者は、除外者に比べて、経済的にゆとりのない者が有意に少なかった($p < .001$)が、他の基本属性に有意な差はなかった。

1. 対象者の概要(表1)

i. 母親および子どもの基本属性

母親の年齢(平均±標準偏差、以後同じ)は 33.7 ± 4.3 歳、最終学歴は大卒以上が371名(42.7%)、自身の健康状態が「とてもよい・まあよい」者は794名(91.5%)、経済状況が「大変苦しい・やや苦しい」者は285名(32.8%)であった。子どもの月齢は 18.3 ± 1.1 か月で、356名(41.0%)は、子どもの発育・発達の心配があった。

表 1 対象者の概要：母親の就業の有無別比較 (n=868)

	全体		就業あり群		就業なし群		
	n = 868	(100.0%)	n = 392	(45.2%)	n = 476	(54.8%)	
母親の基本属性							
年齢（歳）	33.7±4.3	(20～44)	34.1±4.2	(23～44)	33.4±4.4	(20～44)	*a
最終学歴							
大学以上	371	(42.7)	201	(51.3)	170	(35.7)	***b
健康状態							
とてもよい・まあよい	794	(91.5)	363	(92.6)	431	(90.6)	b
経済状況							
大変苦しい・やや苦しい	285	(32.8)	105	(26.8)	180	(37.8)	***b
生育家族へのイメージ得点	11.4±3.3	(0～14)	11.7±3.1	(0～14)	11.2±3.3	(0～14)	**c
子どもの基本属性							
月齢（か月）	18.3±1.1	(16～24)	18.4±1.3	(16～24)	18.2±1.0	(16～23)	*a
性別							
男児	453	(52.2)	207	(52.8)	246	(51.7)	b
出生順位							
第1子	519	(59.8)	257	(65.6)	262	(55.0)	**b
健康状態							
とてもよい・まあよい	863	(99.4)	388	(99.0)	475	(99.8)	d
子どもの発育・発達の心配							
あり	356	(41.0)	153	(39.0)	203	(42.7)	b
夫の基本属性・子育て環境							
年齢（歳）	35.4±5.1	(22～60)	35.9±5.2	(22～60)	35.0±5.1	(22～52)	*a
就業の有無							
あり	860	(99.1)	390	(99.5)	470	(98.8)	d
家族形態							
核家族	817	(94.1)	370	(94.4)	447	(93.9)	d
子どもの人数							
1人	501	(57.7)	245	(62.5)	256	(53.8)	*b
日中の主な保育者							
母親	576	(66.4)	109	(27.8)	467	(98.1)	***b
子育てに対する考え							
子育てのためにやりたいことを我慢している							
そう思う・とてもそう思う	402	(46.3)	175	(44.6)	227	(47.7)	b
三歳児神話に対する考え							
まったく賛成・どちらかといえば賛成	512	(59.0)	142	(36.2)	370	(77.7)	***b
性別役割分業意識に対する考え							
賛成・どちらかといえば賛成	347	(40.0)	83	(21.1)	264	(55.5)	***b
仕事に対する考え							
第1子妊娠・出産による就業状況の変化							
変化なし(「もともと就業していない」または職場復帰)	393	(45.3)	287	(73.2)	106	(22.3)	***b
自分の希望での変化あり（退職または転職）	388	(44.7)	70	(17.9)	318	(66.8)	
自分の希望に反した変化あり（退職または転職）	71	(8.2)	25	(6.4)	46	(9.7)	
仕事満足度							
ほとんど満足していない・まったく満足していない	—		76	(19.4)	—		—
仕事に対する思い							
仕事はせず育児に専念したい	—		—		88	(18.5)	—
子育てが落ち着いたら働きたい	—		—		353	(74.2)	
すぐに働きたい	—		—		28	(5.9)	
「親以外の役割の捉え方」得点	32.1±6.4	(9～45)	34.1±5.7	(14～45)	30.5±6.4	(9～45)	***a

注 1) 無回答・非該当は除く、表中の値は n (%) または Mean ± SD (range)
注 2) a: 対応のない t 検定, b: χ^2 検定, c: Wilcoxon の順位和検定, d: Fisher の正確検定
注 3) ***p<0.001, **p<0.01, *p<0.05, —調査していない項目

ii. 夫の基本属性および子育て環境

夫の年齢は、 35.4 ± 5.1 歳で、817名 (94.1%) が核家族、子どもの人数が1人の者は501名 (57.7%) であった。

iii. 子育てに対する考え

402名 (46.3%) が、子育てのためにやりたいことを我慢していると感じていた。三歳児神話に「まったく賛成・どちらかといえば賛成」は512名 (59.0%)、性別役割分業意識に「賛成・どちらかといえば賛成」は347名 (40.0%) であった。

iv. 仕事に対する考え

第1子の妊娠・出産で就業状況の変化がなかった者は393名 (45.3%)、自分の希望で退職または転職した者は388名 (44.7%)、残りの71名 (8.2%) は、自分の希望に反して退職または転職した者であった。

v. ソーシャル・サポート

夫からのサポートは、情緒的サポートを740名 (85.3%)、情動的サポートを685名 (78.9%)、手段的サポートを741名 (85.4%)、評価的サポートを715名 (82.4%)、また友人からのサポートは、情緒的サポートを793名 (91.4%)、情動的サポートを780名 (89.9%)、手段的サポートを636名 (73.3%)、評価的サポートを789名 (90.9%) が、「まあある・非常にある」と感じていた。

vi. 就業の有無別の比較

「就業あり群」の母親は392名 (45.2%)、「就業なし群」は476名 (54.8%) であった。「就業あり群」は「就業なし群」よりも、母親の年齢が高く ($p < .05$)、最終学歴が大卒以上の割合が多く ($p < .001$)、経済的ゆとりを感じ ($p < .001$)、生育家族イメージが良い者 ($p < .001$) が有意に多かった。また、第1子の妊娠・出産による就業状況の変化のなかった者が多かった。子どもの人数は1人が多く ($p < .05$)、子どもの月齢 ($p < .05$)・夫の年齢 ($p < .05$) が共に有意に高かった。「就業なし群」は、日中の主な保育者が母親である割合 ($p < .001$)、三歳児神話・性別役割分業意識に賛成している割合 ($p < .001$) が有意に多かった。また、第1子の妊娠・出産による就業状況の変化について、「自分の希望での変化あり」、「自分の希望に反した変化あり」と回答した者が多かった。「就業あり群」の76名 (19.4%) は現在の仕事を「ほとんど満足していない・まったく満足していない」と感じ、「就業なし群」の353名 (74.2%) が「子育てが落ちついたら働きたい」、28名 (5.9%) が「すぐに働きたい」と回答しており、

381名 (80.1%) が「働きたい」と考えていた。

「就業あり群」の「親以外の役割の捉え方」の平均得点は 34.1 ± 5.7 点で、「就業なし群」の 30.5 ± 6.4 点より有意に高かった ($p < .001$)。また、全てのソーシャル・サポートに関して、就業の有無別で割合に有意な差はなかった。

2. 就業の有無別「親以外の役割の捉え方」とその関連要因

i. 「就業あり群」の「親以外の役割の捉え方」に関連する要因 (表2)

「親以外の役割の捉え方」得点は、仕事満足を感じている ($\beta = .185, p < .001$)、夫からの評価的サポートがあると感じている ($\beta = .131, p < .05$) 場合に高かった。

表2 「就業あり群」の「親以外の役割の捉え方」を従属変数とした重回帰分析 (n=392)

	β	p
子育てに対する考え		
子育てのためにやりたいことを我慢している	-0.087	
仕事に対する考え		
仕事満足度	0.185	***
ソーシャル・サポート		
夫からの情緒的サポート	0.083	
夫からの情動的サポート	0.048	
夫からの手段的サポート	0.037	
夫からの評価的サポート	0.131	*
友人からの情動的サポート	-0.011	
友人からの手段的サポート	0.077	
友人からの評価的サポート	0.119	
R ²	0.280	
調整済み R ²	0.249	

注1) 無回答は除く。
 β : 標準化偏回帰係数, *** $p < .001$, * $p < .05$
注2) 子育てのためにやりたいことを我慢している :
まったくそうは思わない・ほとんど思わない = 0,
そう思う・とてもそう思う = 1
仕事満足度 :
ほとんど満足していない・まったく満足していない = 0,
とても満足・満足 = 1
夫からのサポート :
まったくない・あまりない = 0,
まあある・非常にある = 1
友人からのサポート :
いない・まったくない・あまりない = 0,
まあある・非常にある = 1
注3) 調整変数 : 母親の年齢, 母親の健康状態, 最終学歴, 経済状況, 子どもの人数, 子どもの発育・発達の心配, 生育家族イメージ良好度

表3 「就業なし群」の「親以外の役割の捉え方」に従属変数とした重回帰分析 (n=476)

	β	p
子育てに対する考え		
子育てのためにやりたいことを我慢している	-0.266	***
三歳児神話に賛成	0.023	
性別役割分業意識に賛成	0.018	
仕事に対する考え		
第1子の妊娠・出産による就業状況の変化 (自分の希望での変化あり)	0.008	
第1子の妊娠・出産による就業状況の変化 (変化なし)	0.006	
仕事に対する思い (仕事はせず育児に専念したい)	0.119	
仕事に対する思い (子育てが落ちついたら働きたい)	0.079	
ソーシャル・サポート		
夫からの情緒的サポート	0.065	
夫からの情動的サポート	0.073	
夫からの手段的サポート	0.077	
夫からの評価的サポート	0.206	***
友人からの情緒的サポート	0.085	
友人からの情動的サポート	0.047	
友人からの手段的サポート	0.118	**
友人からの評価的サポート	0.013	
R ²	0.406	
調整済み R ²	0.375	

注1) 無回答は除く, β : 標準化偏回帰係数, ***p<0.001, **p<0.01

注2) 子育てのためにやりたいことを我慢している:

まったくそうは思わない・ほとんど思わない=0, そう思う・とてもそう思う=1

第1子の妊娠・出産による就業状況の変化 (自分の希望での変化あり):

変化なし, 自分の希望に反した変化あり=0, 自分の希望での変化あり=1

第1子の妊娠・出産による就業状況の変化 (変化なし):

自分の希望での変化あり, 自分の希望に反した変化あり=0, 変化なし=1

仕事に対する思い (仕事はせず育児に専念したい):

子育てが落ちついたら働きたい, すぐに働きたい=0, 仕事はせず育児に専念したい=1

仕事に対する思い (子育てが落ちついたら働きたい):

仕事はせず育児に専念したい, すぐに働きたい=0, 子育てが落ちついたら働きたい=1

三歳児神話に対する考え:

まったく反対・どちらかといえば反対=0, まったく賛成・どちらかといえば賛成=1

性別役割分業意識に対する考え: 反対, わからない=0, 賛成=1

夫からのサポート: まったくない・あまりない=0, まあある・非常にある=1

友人からのサポート: いない・まったくない・あまりない=0, まあある・非常にある=1

注3) 調整変数: 母親の年齢, 母親の健康状態, 最終学歴, 経済状況, 子どもの人数,

子どもの発育・発達の心配, 生育家族イメージ良好度

ii. 「就業なし群」の「親以外の役割の捉え方」に関連する要因 (表3)

「親以外の役割の捉え方」得点は, 夫からの評価的サポートがあると感じている ($\beta = .206, p < .001$), 友人からの手段的サポートがあると感じている ($\beta = .118, p < .01$) 場合に高く, 子育てのためにやりたいことを我慢していると感じている ($\beta = -.266, p < .001$) 場合に低かった。

IV. 考 察

1. 対象者の特徴

対象者は, 就業ありの母親が45.2%と出生縦断調査¹¹⁾対象の3割より多く, 最終学歴は大卒以上が42.7%で, 関東圏内での先行研究²²⁾の2割よりも大幅に多かったことから, 一般集団に比して, 就業者・大卒以上が多い集団であったと言える。

2. 就業の有無別の対象者の比較

「就業あり群」は, 「就業なし群」より, 夫婦ともに

年齢が高く、母親の最終学歴は大卒以上が多く、子どもの人数は1人が多く、三歳児神話や性別役割分業意識に反対する割合が多かった。「就業あり群」の母親は、大卒以上の者が半数以上で、先行研究¹¹⁾の2割より大幅に多く、また、子育てや仕事に対して男女平等であるという考え方を持つ割合が一般よりも高い集団であると推察できる。

3. 「就業あり群」の「親以外の役割の捉え方」とその関連要因

「就業あり群」は、「就業なし群」よりも、「親以外の役割の捉え方」得点が高かった。さらに、「就業あり群」の母親の中でも、仕事に満足を感じている場合に得点が高かった。すなわち、「就業あり群」では、「母親」、「妻や女性」に加えて、「社会の一員」、「職業人」等の多重役割を担うことにより、各役割からの資源や恩恵を得て全体的な地位が安定・向上し、精神的、身体的に健康になる増大仮説²³⁾が当てはまる。つまり、母親は、職場、同僚や先輩等職場の支援者から賃金やサポートを受けることで、自分自身の居場所やアイデンティティを確立でき、親以外の役割に満足することで、「親以外の役割の捉え方」が良好になったと考えられる。逆に、仕事に満足していない場合に、「親以外の役割の捉え方」得点が低いことは、従事する役割が多くなると要求や義務が多くなり、これは、多重役割を担うことが負担感を引き起こす欠乏仮説²³⁾に当てはまる。本研究でも、仕事に満足していない母親が約2割存在し、「母親」、「妻や女性」、「社会の一員」、「職業人」と多重な役割を持ち義務や要求が多くなることが負担感になっていると推測される。「就業あり群」は、仕事役割を持ち、かつ、仕事満足を感じていることにより、「社会の一員」、「職業人」としての自己を前向きに捉えることができるため、「親以外の役割の捉え方」が良好になると考えられた。以上より、母親が就業している場合、「親以外の役割の捉え方」を良好にするためには、母親が仕事に満足を感じているかどうか重要な視点であることが明らかになった。

また、夫の評価的サポートがあると感じている場合に「親以外の役割の捉え方」得点が高かった。母親にとって夫からの評価は、「母親」としてだけでなく、「妻や女性」、「社会の一員」、「職業人」等、いわゆる、親以外の役割を良好に捉えることにつながった可能性がある。しかし、友人からのサポートは、「親以外の

役割の捉え方」に関連しなかった。働く母親は仕事を通して社会とのつながりを持つが、地域社会との接点が少ない²⁴⁾。そのため、友人よりも、本研究では特定して尋ねなかった同僚や先輩等職場の支援者からのサポートがある場合、「親以外の役割の捉え方」が良好になっていた可能性がある。

4. 「就業なし群」の「親以外の役割の捉え方」とその関連要因

「就業なし群」は「就業あり群」よりも「親以外の役割の捉え方」得点が低かったが、夫の評価的サポートがあると感じている場合に「親以外の役割の捉え方」得点が高かった。これは、前述の「就業あり群」の場合と同様の機序と考えられるが、特に、社会との接点の少ない「就業なし群」にとって大きく影響していることが推察される。また、友人からの手段的サポートがあると感じている場合にも、「親以外の役割の捉え方」得点が高かった。友人からのサポートを直接的に受けることで、母親が自分のための時間を確保でき、「親以外の役割の捉え方」が良好になったと推察された。

一方、子育てのためにやりたいことを我慢していると感じている場合に、「親以外の役割の捉え方」得点が低かった。専業主婦の15.6%が、「自由な時間が持てない」¹¹⁾、「自分だけで子育てをしている」という不満を持っている²⁵⁾ように、本研究の母親も、自由な時間を取れず、母親一人で、家事や子育てを担うことによって、自分のやりたいことを我慢していると感じ、それが、「親以外の役割の捉え方」に影響したと考えられる。

5. 本研究の限界と今後の課題

本研究は、回収率が高くなく、かつ、調査に協力した母親は子育てに関心の高い集団であった可能性がある。また、横断的研究であるために、変数間の関連性しか説明できていない。さらに、首都圏を対象にしたこと、一般集団に比して、就業者・大卒以上の者が多かったことから、一般化するには限界があり、母親の就業や教育歴の背景が類似していると推測される都市部での活用にとどまる。今後、対象者の属性が異なる地域での調査の実施、実母のサポートや母親の就業以外の役割として地域活動や趣味等を調査項目に加える、就業形態別に分析する、また、要因間の機序を

明確にする等工夫が必要である。上記の限界はあるものの、「親以外の役割の捉え方」に焦点を当て、特に、母親の就業の有無別に関連する要因を検討したことは新しい試みである。「就業なし群」は、「親以外の役割の捉え方」が「就業あり群」と比べ良好でなかったが、明らかになった要因に働きかけることで「親以外の役割の捉え方」を良好にすることが期待できる。

また、本研究は、母親の役割の捉え方を良好にすることが、母親の育児行動にどのように影響するかまで明らかにできていない。本研究の対象年齢でもある2歳までの子どもの健全な発育・発達のためには、母親の愛着行動は重要²⁶⁾である。今後は、母親の役割の捉え方が、母親の育児行動および愛着行動にどのように影響するかを明らかにする研究が必要である。これにより、母親の役割の捉え方を良好にするための支援の根拠を示すことができるだろう。

V. 結 論

母親の就業の有無別に、幼児を育てる母親の「親以外の役割の捉え方」に関連する要因を探索した。「就業あり群」は、仕事に満足を感じている、夫からの評価的支持があると感じている場合に良好であった。「就業なし群」は夫からの評価的支持、友人からの手続的支持があると感じている場合に良好で、子育てのためにやりたいことを我慢していると感じている場合に良好でなかった。

これまでは「親役割の捉え方」を良好にするための子育て支援が多かったが、本研究により、「親以外の役割の捉え方」を良好にするための要因が明らかになり支援方策が得られた。「親役割の捉え方」、「親以外の役割の捉え方」の双方を良好にするための支援により、母親が子育てに前向きになることが期待できる。

特に、仕事役割を持たない「就業なし群」において、夫からの評価的支持・友人からの手続的支持を得ること、子育てのために自分のやりたいことを我慢しすぎないことが有効であることを看護職等の保健医療職が教育・啓発し、同時に、母親だけでなく、夫にも積極的に働きかける重要性が示唆された。

謝 辞

本研究にご協力くださいました調査対象者の皆様、東京都内の7ヶ所の自治体の職員の皆様に心より感謝申し上げます。

なお、東京大学大学院医学系研究科修士課程論文の一部である。

文 献

- 1) 国民衛生の動向. 厚生統計協会編. 東京: 厚生統計協会, 2011/2012; 58 (9).
- 2) 新道幸恵, 後藤桂子. ルヴァ・ルービン母性論: 母性の主観的体験. 第1版. 東京: 医学書院, 1997: 1-13, 117-128.
- 3) 山崎あけみ. 育児期の家族の中で生活している女性の自己概念—「母親としての自己」・「母親として以外の自己」の分析—. 日本看護科学会誌 1997; 17: 1-10.
- 4) 大橋幸美, 浅野みどり. 育児期の親性尺度の開発—信頼性と妥当性の検討—. 日本看護研究学会雑誌 2010; 33: 45-53.
- 5) 大日向雅美. 母性の研究. 東京: 川島書店, 1989.
- 6) Emmanuel E, Creedy DK, John WSt, et al. Maternal role development following childbirth among Australian women. Journal of Advanced Nursing 2008; 64: 18-26.
- 7) 岩崎和代, 原田留美. 乳幼児を育てる母親の母性意識と育児観に関する研究. 栃木母性衛生 2010; 1: 54-62.
- 8) ジュディス・M・バードウィック. 女性心理 性的・社会的葛藤の分析. 東京: 原書房, 1974: 173-219.
- 9) 遠藤恵子, 佐藤幸子, 三澤寿美, 他. 山形県に住む母親の母親役割の受容と性役割感に対する意識. 山形保健医療研究 2003; 6: 17-24.
- 10) 清水嘉子, 遠藤俊子, 松原美和, 他. 子育て期をより幸福に過ごすための母親の工夫とその効果. 日本助産学会誌 2007; 21: 23-36.
- 11) 第8回21世紀出生児縦断調査(平成21年). 厚生労働省大臣官房統計情報部編. 財団法人 厚生統計協会 2011; 30: 410-411.
- 12) 第8回世界青年意識調査. 内閣府. [cited 2012/4/30] Available from: < <http://www8.cao.go.jp/youth/kenkyu/worldyouth8/html/mokuji.html> >
- 13) 原口由紀子, 松浦治代, 矢倉紀子, 他. 母親の個人としての生き方志向と育児不安との関連. 小児保健研究 2005; 64: 265-271.
- 14) 古川洋子. 日本における産み育て支援システムの構築. 人間看護学研究 2008; 6: 71-76.

- 15) Kahn RL, Wolfe DM, Quinn R, et al. Organizational stress. New York : Willey, 1964.
- 16) 渡井いずみ, 錦戸典子, 村嶋幸代. ワーク・ファミリー・コンフリクト尺度 (Work-Family Conflict Scale : WFCS) 日本語版の開発と検討. 産業衛生学雑誌 2006 ; 48 : 71-81.
- 17) 小堀彩子. 子どもを持つ共働き夫婦におけるワーク・ファミリー・コンフリクト調整過程. 心理学研究 2010 ; 81 : 193-200.
- 18) 富田庸子. 本能的で育てるか / 大脳と体験によって育てるか. 柏木恵子. よくわかる家族心理学. 第1版. 京都 : ミネルヴァ書房, 2010 : 94-95.
- 19) 赤澤淳子. ジェンダー化する恋愛. 柏木恵子. よくわかる家族心理学. 第1版. 京都 : ミネルヴァ書房, 2010 : 40-41.
- 20) Cohen S, Gordon LU, Gottlieb BH, et al. ソーシャルサポートの測定と介入. 第1版. 東京 : 川島書店, 2005.
- 21) 坂間伊津美, 山崎喜比古, 川田智恵子. 育児ストレスの規定要因に関する研究. 日本公衆衛生雑誌 1999 ; 46 : 250-262.
- 22) 小坂千秋, 柏木恵子. 育児女性の就労継続・退職を規定する要因. 発達心理学研究 2007 ; 18 (1) : 45-54.
- 23) 小泉智恵. 仕事と家庭の多重役割が心理的側面に及ぼす影響 : 展望. 母子研究 1997 ; 18 : 42-59.
- 24) 山田英津子, 有吉浩美, 堀川淳子, 他. 働く母親のソーシャル・サポート・ネットワークの実態. 産業医科大学雑誌 2005 ; 27 : 41-62.
- 25) 倉林しのぶ, 太田晶子, 村岡治子, 他. 乳幼児健診に来所した母親のメンタルヘルスに及ぼす因子の検討—対象児の年齢との関連—. 日本女性心身医学会雑誌 2005 ; 10 : 181-186.

- 26) 古澤頼雄. 子どもはだれと愛着を形成するか. 柏木恵子. よくわかる家族心理学. 第1版. 京都 : ミネルヴァ書房, 2010 : 142-143.

[Summary]

The purpose of this study was to explore factors related to recognition of non-maternal role among mothers rearing toddlers in a metropolitan area according to the working status of mothers.

A cross-sectional study was conducted by self-administered questionnaire. Questionnaires were distributed and mailed to 2,342 mothers who attended 18-month child health checkups in 7 cities in Tokyo metropolis in 2011. Questionnaires were returned from 914 mothers; of these, an effective response was obtained from 868 (effective response rate=37.1%).

Multiple regression analysis was performed. Among working mothers, 'recognition of non-maternal role' was positively related to and job satisfaction and appraisal support from her husband. Among non-working mothers, 'recognition of non-maternal role' was positively related to appraisal support from her husband and instrumental support from her friends, and negatively related to tolerance of what they want to do due to rearing toddlers.

Particularly, exploring the factors related to 'recognition of non-maternal role' among non-working mothers who do not have a role of a job is expected to be helpful for future approaches to childcare.

[Key words]

mothers rearing toddlers,
recognition of non-maternal role, social support,
working status